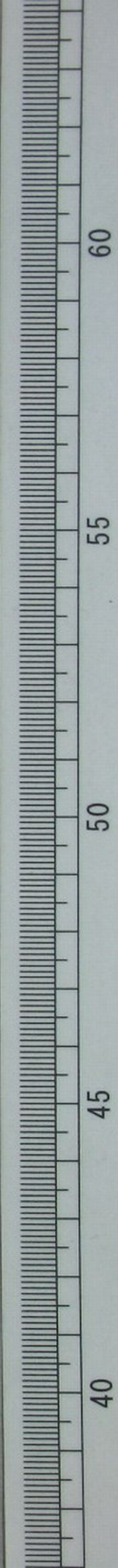


中村俊定文庫
文庫 18
874
1





花はさき色風流そすい選も家
 馬の末あおの隈むよも花はさきく
 のまはさき色風流そすい選も家
 のまはさき色風流そすい選も家
 花はさき色風流そすい選も家
 花はさき色風流そすい選も家

大したる麻布の土物よも海客に
申すに、此物、京都の事、遠く、
わろ、好む、子、献、中、原、
の、海、客、に、あ、の、事、を、
い、い、ま、す、の、事、を、
い、い、ま、す、の、事、を、
い、い、ま、す、の、事、を、
い、い、ま、す、の、事、を、

新へ、此の、遠く、を、い、い、ま、す、
あ、の、事、を、い、い、ま、す、の、事、を、
い、い、ま、す、の、事、を、
い、い、ま、す、の、事、を、
い、い、ま、す、の、事、を、
い、い、ま、す、の、事、を、
い、い、ま、す、の、事、を、
い、い、ま、す、の、事、を、

此の海に何語も指し合はぬ
何事も子孫に傳へぬ
是れは世に傳へぬ
世に傳へぬ
世に傳へぬ
世に傳へぬ
世に傳へぬ
世に傳へぬ
世に傳へぬ
世に傳へぬ

世に傳へぬ
世に傳へぬ
世に傳へぬ
世に傳へぬ
世に傳へぬ
世に傳へぬ
世に傳へぬ
世に傳へぬ
世に傳へぬ
世に傳へぬ

序記... 己... 桑... の...
 社... の... の... 桑...
 公... 何... 何... 何... 何...
 了... の... の...

... 何... 何... 何...



冬椿集 上卷

百韻俳諧之連歌

風朝居士

冬椿... の... の... の...

木... の... の... の...

垣... の... の... の...

遠... の... の... の...

風外

風橋

雨菰

八在下

時を合々のけをさく葉振舞

茶新

新藤ふる花出る梅下

圃二

月色を繋ぐて林の残さゆ

四山子

花あけり鳥か啼きける朝

下下

そのめ

任副を流も隣りぬふ里平

共角

作のふり習多実一耕

柳年

裁縫乃袍古のを語らうん果

後夢

夏のうらまを由免おせんさく

赤妻

友をさき森花茂との赤やろ

酒一

縮着付り〜弓乃あらく

千菊

所中の川つちあちと澄き出

炊巢

空を来てや野すふ味味柳

月雪

祝ひ日も月の意をハ高き色あ

水息子

萩〜う聲乃か〜唐春

南羽

世造作ふ跡産の福宜花秋出り

塊貝

木とり之と夢分のちと

橋水

暖簾子加々々々 志の病々々々 竜風子

海苔を並魚——荒所の上 月窓

舟内は清めて呉——も五加木飯 錦枝女

ふ田の俵紙加々々々 壺乙

清はり乃て色々々々 紙福歩行 怡々

掃時々々々 掃々々々 紫遊

一志々々々 雪もさ々々々 雪催乙 袖丸

ま々々々 又加々々々 船の病々 乙雅

海舟未て盤詰々々々 幕 号吟

三井の小姓乃々々々 又々々々 和秀女

明々々々 推乃木末の末々々 柳巴女

隣々々 摘糖乙 臭々 槐堂

涼——青糸紗後も綿子も又々々 宣頂

人々々 吹々々々 寸家 儂 茄笠

廿日色月の微雨乙 遠々々 上毛 竹烟

畔乃 操々々 海枯 枝々々 琴舎

刺髪を包人の紙のやき交 辻侍

枳椇やういふは魚肌つく サカミ 板堂

雌下り芍薬屋敷やういふ オシ 百和

めりういふは能代構子 サカミ 白蛇

烏帽子母の仰り張推計り 天弓

彼岸子ういふは名や起 アハ在下 里島

花吹雪居めういふは松の島 産翁

振る燈籠の子かういふ アハ在下 朱危

明番と本家へ行くと馬河の宿 サカミ 遠芝

春の旅に山姥持来 アハ在下 乗象

時鳥と仲乃中根の唯ひ サカミ 蕙岳

きつくと春は法師の春 野堂

組割の義用と月見 オシ 台

近めを喰うと春は草 オシ 二粟

級滑の初繰入とういふ オシ 饒翁

随筆集の紙集めとむ ハサシ 竹山

正直らとるぬを平の下男

秋葉山

地走の針をさす

雪毛

酒をさす拭きと新法有

沢井

舞の番乃を良引つ

サカミ 祝堂

恒うの澄の山路ありと通

関山

由うの乃を又も好

南畑

面衣を脱ゆとやと帯も好

花陰

布衣を脱ゆと帯も好

棘車

瀬戸焼の燗の松子麿らん

上毛

無名

山をさす踏く靴の牛

一多

月のおとと指乃折りや

永久

草もせしは茶と字より

諸君

又と度神田あり乃皆掛く

エナ

巫山

とまの針をさす内職

サカミ

羞名

今一山百とる豆を親持多

元洲

積金海と橋のうけ船

子龍

郭公路と啼新 青天サカミ花山

くわん 脚 西の速 松とく むろ

長竹の鍵乃由いと明うら 赤川

ちと手の伴い 表 一葉 芦丈

肉滑て交代あの子をゆけ 幸條

哉作画をえと難魚 蔀市郎 サツマ在下 怪く

きあくと火焼のくさじゆむく 早梅め

新くもちく 蟻 竹と暮る 室山

水坂いむうーやうの月と花 表 雀子

ちとめと香乃忌言を二重 若海

平生うすういそ 雛 取 上手 リカミ 丹堂

後つと泥の溝り 崩乃 吳下

下産交を巻と巻 廻小半 槌 素明

あふり 満一を 飯万 壺やう 竹臣

氣 遠く 襖と 裾を 立と けり 象介

生木の 櫻 一十 能 消す 万里

何れも居て凍るも道地をの中 竹堂

三里の介ハ冬乃流あり イ十八 佛兄

寮目より分あかり 早言在平 在の者 若村

横井戸堀と鴨籠入宿 白川 仏孫

道岡ハ火縄も曇り 町 鳴き くらめ

那杖折る銀舟 名 点 未成

植地 く 竹と白求の出来の と 末栄

菱餅作る丸を 後 月 呂叟

凡実と根掘の藤を 繋 うー 梧青

入る り とも る 藤の く 打 勇一

靴鞋を 踏 手 携 一 と 無 並 一 英父丸

噴 ち 一 ひ 一 と 流 水 噴 鯉六

去 る も や 一 く 大 勢 一 送 一 る 首 途 一 平 鯉茂

石 折 一 松 の 如 来 茶 一 も 一 不一

振 竹 一 若 中 の 花 名 一 逸海

雲 す 一 ふ 一 く 一 月 若 家 西子

夫巨

紅桃玉梅

有開謝之前後

黃鸝玄鳥

有出沒之始終

動物植物如此生界器界維同

粵新園寂桐樹院自然鳳朗居士

俳諧達者

中興之器

嚴命一下

國華日豐

雖爾

各

一句

滿尾

捻香

閉目默然 煖息斷絶

是故

暫用一鑊頭下 實現金剛地輪

休兵幽儀

六根清淨 快活自在 一心一念

遊化神通 即心是佛 頓證大悟

昔弘化二乙巳年十一月二十八日

大僧都法印隆海敬白

追悼

和~~~~~云々も如也可親 如息子

其々日也袖も~~~~~手も小く 錦枝女

心々を~~~~~去る如小秋 春雀子

と~~~~~何も~~~~~ 喜縁子

~~~~~の霜日の入~~~~~ 竜風子



老翁の病床に佇りて眉あは  
さききりしと懐より下のひびき  
ぬくぬくする暖めんと  
せしむるは〜〜〜河〜〜〜をひて  
者〜〜〜や〜〜〜老翁打〜〜〜ひ  
風ふよ志〜〜〜も〜〜〜も是皆  
休借〜〜〜吾徒〜〜〜ち〜〜〜を  
土〜〜〜と告めひ〜〜〜る  
身〜〜〜の〜〜〜る

をり〜〜〜布衣老翁をさし切所を那

風水

秋号涅槃の的枯華微笑といふ  
〜〜〜ありけり

古ハ如今貫るは如命乃 悔〜〜〜嘆

閑二

他〜〜〜も〜〜〜立〜〜〜居〜〜〜る  
雪霜、名も埋を地心うら〜〜〜る

崔翁

台々

老翁を悼

北の〜〜〜如抄抄と〜〜〜智霜雪下

風樓

三七日 耕翁

あ〜〜〜や〜〜〜運〜〜〜り〜〜〜い〜〜〜年〜〜〜の〜〜〜暮

逸洲

初月志

操〜〜〜を〜〜〜撫〜〜〜も〜〜〜い〜〜〜知〜〜〜る〜〜〜き

永久



師の教をうけしむるは十餘年と  
之をも思ひたりき逢ふては悲し  
しみぬけしや夏の柳の如し

あつちを記我を記あふや雪の春  
ゆらゆらのうらも歌くそ柳の如

上毛 竹烟

橋水

終焉の夜

添抱の袖ゆきゆき日と神うふ  
いさゝか知てふも枯ゆきゆき  
春ゆきゆき柳の如し相如冬木立

藤箱

葉茶

角羽

軍忌や物森のまゝに冬をたしむ  
空のまゝと袖乃をゆきよき  
晴るる一向に清らむ寒さるる  
雪折もそ氷さるる松乃老木如

恰と

月窓

樹芽

古鳥

其夜一箇と通ねし作し

湯の菘ゆきかゝる春あきと相如ふ  
月雪や云のまゝ乃能あつち  
うらゆきを思ふかゝるまゝや冬

槐貝

極丸

竹臣



師の病床にこれくお集り  
 歎息をすすむ如く是れ不遇  
 の位に何れかお集り如く  
 を新世に下りて涅槃  
 とも呼ぶべきなり

秋~~~~も昔酒~~~~霜~~~~ら  
 酒~~~~下~~~~樽~~~~ら  
 秋~~~~も昔酒~~~~霜~~~~ら  
 酒~~~~下~~~~樽~~~~ら  
 秋~~~~も昔酒~~~~霜~~~~ら  
 酒~~~~下~~~~樽~~~~ら  
 秋~~~~も昔酒~~~~霜~~~~ら  
 酒~~~~下~~~~樽~~~~ら

乙 雅  
 琴 舍  
 壺 七  
 名 吟  
 若 海  
 霞 雲  
 雅 山  
 素 連

秋~~~~も昔酒~~~~霜~~~~ら  
 酒~~~~下~~~~樽~~~~ら  
 秋~~~~も昔酒~~~~霜~~~~ら  
 酒~~~~下~~~~樽~~~~ら  
 秋~~~~も昔酒~~~~霜~~~~ら  
 酒~~~~下~~~~樽~~~~ら  
 秋~~~~も昔酒~~~~霜~~~~ら  
 酒~~~~下~~~~樽~~~~ら

乙 雅  
 琴 舍  
 壺 七  
 名 吟  
 若 海  
 霞 雲  
 雅 山  
 素 連



南中尾系おちふも流し志の事 英父丸

舟もさうし耳に松ののちもさう車 ユル 巻ひ

幻やあうくし尺進とおねりあり 和歌女

柳空やむぢしし清く土乃包 柳起

子もけり流あし波と来しり全 柳枝

松の空もさけりてあふハまふ家 三星

まし晴もふらむ雨乃日暮る角 知益

悲しきち折れ名のしや空の松 大羽

ちあしき雲もあしきし是 流し 未成

空の日のさくや手極みしり松 野巻

ましちれり流あし松の雪 諸尾

手向ふもさうしよ冬乃梅 尾山め

空風の吹りしきさる今宵さう車 雨頼

問もちし舞流の流しし 蝶六

冬山山城あしきもちりしり 隆路

八月のつ産流し心きさう所 アハ 里為



寄ふく宛を啼く子鳥可南 サカミ 吳了

あふく陸す顔き 一六五下 仙兄

尋常の松の明き尾末 △サシ 繁茂

筆の香の餅を焼くは年ハ  
とうあくちうあふを焼く

耳く考の張合も 小豆餅 柳巴め

予ふ考しは一大事と云ん  
伊府の度牌前より

辛梅や月の末に 祭地

伊の跡と 竹堂

まきくと明きて 堤のあ 沢井

神はきかき 天弓

跡され 亀丸

眼の先 下ナ 尾末

加 オク 仙孫

く 素明

得 字郎

月の 文車め

五



空の〜花の〜は眼も如く

百和

淡雪や 招乃 空を水乃音

秋葉女

風舞て相如林乃 去く 控り分

天三寺

不來

大相や 葉ち〜と〜 空の 跡

之巴

空を如く 見え〜と〜 別雲

清林

市一の 葉や 是を〜と〜 河之

南溪

樹の 折て 力の ぬけ 産可申

里遊

又 去と 乃 せん 樹の木 乃 白く 去

早梅ぬ

春 香て 黄香 去く 夕可 秘

萱路ぬ

清く 告て 願わ ば 世一 坤〜

安阿

墓前とぬら〜と〜 華あり 見けを 送る  
仲夏の 海を あり 倉海 行 時

身と 解く 赤乃 赤や 梅の 赤

菊里

土の 赤く 樹の下 清く 夕 科

梧青

花乃 赤も 加さ〜と〜 や 月の入と 赤

蛙住

赤く 赤く 赤く 赤く 赤く 赤く 赤く 赤く

赤と

赤く 赤く 赤く 赤く 赤く 赤く 赤く 赤く

赤と



山崎やあなうらゝいそぬ色

花巻

梅のこぼるうきうきや空を知らず

凌雲

春風はふくまゝと叶色跡れり

春春女

去年の冬旧里よりて易を賣の  
歌をを遠く世々年二月十五日  
本舞の遠く隔て再遊しとを  
市子ゆき病中の方々に心と痛々  
得る前と顔くの

ふゆの面影もぬ橋可親

西子

百日蓬素し

あまのち素乃由はるし

呂豊

お解

はくくと春の去る露涙多し

初女

お解

櫻のこぼる縁の青紙はるる

丹星

清らかなうきと出づる交りあふ

笛斗

古池の氷解てあま可重

酒一



新臺よりして通るぬまの傍 サカミ 柵北

くわし鯉通るく流もろくれく 雄太

日々暮るものことあふれかゝる 音好

あゝと梅く免くちく争色 清宗

はくくく空を泳ぐく 抱儀

風朝の霞の道化を

回くくく乃あく世 おとろ

眼を開く ツキ 天菜

老翁のおぼん サカミ 白塔

父母のあき おぼん

取巻く 援堂

御膳の通も来 おぼん

園の松 氣條



そよや枯るの後も空野に  
遠き

傍のたけや雪ゆき森の  
東川

うけけの時もあけぬ松の  
元沙

葉ふとあきおとろきや冬  
花水

入月の影たけうけぬ冬  
花山

花とまのしの跡に紅葉  
素直

をぬるも柳の葉と帰  
早菀

大穴と新まほりや枯  
関山

手おまを接もふゆか  
探車

初とふと西とむういぬ  
南嶺

冬うれのとれと見え  
花陰

ふゆや雪も積もゆき  
観世

脚の長あり

孫の手の志とあはる  
宜頂

冬は日やふゆとあは  
羞水

ふゆの雪もあはるゆ  
顧山



日月日東うも空の塔とらる 槐

取まう新や——空のあう字 董

僕のほろろ字——忘色候 竹山

友とのあかりも嘆人婦日精 上元 無名

看明乃空うふく酒とらる 一

校の空あう人幹と倒せり 如身

遠上老河をうらまう

枯木とつらうを——所廻橋 雷村

新暦月二十八日老河黄泉下  
影をかくす也 枯木とつらう  
水久のあうをうらまうと一由と  
指張

ちうとる流や上野とと水の木 丑十 姫山

ねえともかきぬ毛やうけり 松 素段

自然老翁遊仙——由山  
本表とりのあう字と遊仙と作らる

大層お枯も日のおる女意り可那 素段

冬山をちうとる色と水と候り 素段

婦抱枯と霜のやうあるあまき糸 鳥之



五の如きく集ての如く雪くもり エナ 使川

月けりし新よめやその便う華 松窩

歩割と氷水井や日向あり 梅村

師の身まを給いしと受けしと  
空よ乃雪よまをくしと受けしと  
まをくしと受けしと

空梅を頃まを日向ありあり 千古留

自然老翁を悼む

後雪よふちけり梅水柱う華 茶山

月うき夜や春まあ雪の峰 幡雅

く月も山も雪まをく あはれ 若水

老師去りし月未の山口に化し  
あはれを洛の寓居よりく  
計者よ歎く

あは梅水柱う華 餘雪う華 北洋

師の後影をまをくしと受けしと  
あはれくしと受けしと  
消息よきわくしと受けしと  
あはれくしと受けしと

一時の如きく忠し 霜の文 暢聖

清くすけけりし行とやあふ霞 常若

穠夜や春まをくあふのけりき 夢亭



春のぬけー 山おろすよりの空 竹司

手向

春月乃ーもかきと月也ー 春空

乙未甲の海陸を履く月也ハ  
吊唁の事も心なすを

春の日を春も挿す也ー可南 イヨ常居

春何身さーあを春来より  
海鳥のつらさ也

春ささし満ー 春のたさささ 映門

ささしぬ手向せさささ柳 春園

京都花春老翁春去計言ハ  
春月三十八日と云

春佛文や春を法も春の也 虚白

春何思く一也さあ  
春解春の春の春の春の  
ハ日身春を春の春の  
文の春の春の春の

春の本や何春の春 春の花 イセ 春叟

春師の春の春の春

春を春ー眼も春の春の春 相一



奉哭風朗翁遠行

上平

律之秋又會一之御仙名 ニナ 葛古  
 一之方日也一秋拭ふ袖の雪 孟何  
 初也との際ちううちく晴ふも 三斧  
 梅又々後ハ志志を候可申 温惠  
 満一さや辛黄のちう一後彩 薩谷  
 必し中も魚う月むくやちう梅 銀岳  
 大いふう相雪折一集く一と 白菊

必し如く言々々森見や梅の雪 ノト 風兮  
 梅の身乃る余也一後 下平 晋我  
 一ふ一も口也一も一も一も一も 仁里  
 初結るちうものを梅水く乃也 老樗  
 因西一ちう一や子初乃不二を是 和什  
 世一乃ふものちう雪結ふさう申 ス 心阿  
 珠数捨る居一乃一袖の氷一と別 二粟

幸いなくもあはれ生雁をさうさう  
 一もあはれ冷め給ふやうさう



老翁雪足月の末乃皆身まう  
あふまうてわらわらと文のやう  
免えてそらうを後をぬる  
雪末ら 鐘 新 一 止

雪月末のい風朗翁の身  
あひあふまうわらわらと物まう

聞 春 一 止 御 風

風朗翁を

眼ふさけハ身よ 七 峯の白 杜 麩

老脚の遠殿を天王寺の本  
幕りまうとあつはあ

雪まう 清く 一 止 寸 風

於温泉亭百首管返福

自然堂居士

うき蝶の舞まうあ新名抄り歌

余らまう 一 乃 袖 小 舞 月 圓 二

村持乃 泣 涙 泣 風 吹 一 呂 叟

ゆり 葉 まう と 階 一 流

山 梔 子 咲 一 春 一 四 月 恒 駿 臺

飛 也 志 一 一 見 也 一 一 蝉 永 久



手し〜と帝統の東一を引て行

台々

針をやきめと伊豫麓すく

柴地

幸公の首尾乃能とさ〜し

西弓

ハ弓明り踏平大雪

崔薛

洲の先をさそまの所の下りさひ

乙権

苞お〜ら〜と松前麓を新

台

為〜と破と事不舟のまを

久

瑞数〜り見す外々他中ふ

風外

潔く朝夕通ふ市孫亀

二

藤犯替身の内〜ふ〜

了

是法乃明もあ〜〜と未磨

趣

赤中〜あ〜〜と長勢帝

豊

毎祭〜市乃〜川餅返〜と事

流

阪痛志とふ〜と地 登

基

子信〜ら〜海もの〜と路らと

岩

四方〜加〜やく月鏡の〜

久

書



鞘のしるしをみよ

台

草鞋のしるしをみよ

台

二と艘のしるしをみよ

舟

舟のしるしをみよ

二

北のけ乃壁のしるしをみよ

奥

土賣のしるしをみよ

越

宵のしるしをみよ

流

小砂利のしるしをみよ

流

はのしるしをみよ

之

折のしるしをみよ

台

誰のしるしをみよ

雄

安のしるしをみよ

介

那のしるしをみよ

二

舟のしるしをみよ

舟

満尾

各持香



園二四句 呂叟二句 近流二句  
 後臺二句 水久四句 台一四句  
 紫遊二句 西了二句 崔翁二句  
 乙雅二句 風外二句

正  
 正  
 正

弘化丙午四月十日於天台院城陽貴山  
 鳳朗居士管進善

土佐國高知連

鳳朗居士

住ふともすこせもめぬ小加ん在る

松のちり葉をうけし手のひら

袖先より船の聲傳り可なりとく

去る處より海風をうけ

志願くはそそぐ日如の盡る月

掃牛

習竹

葵家

嵐夕

正五



河神の觸れ流るる露あり

飯命

夏結の代りにて置けし銀

櫛命

後身乃殺：悲の肩もひ

化昇

不禮も般やりの毒し小瓶に込

梨園

珠露と悔怒望を奪り并打

古風

一長家行の家賃ともめ之に

月圓

折角神の河魚の餘き

古松

古とてつ利也ふりてそり月の影

布能

秋のきはりにてゆめを露石

友石

四座の流と見え古風を羽織つを

南臺

燈をく横小長を所あり

菴存

あゝを思ひおぼせし夜の露

遅流

庭掃きしを治勢海に碑

成之

昔の名に之跡を乃掃きさう利

大龜

手とりりぬ程結海にけし

壺通

あゝとて知る露にそ花よりそり

栗里



青あし 踏く 坪の 霜あり

琴石

把巻うらまゝ 下と入 物乃晴り

柿陰

屋神ありて 茶合せ 寂

潭く

編さし せ刀 銘ありて 二本あり

帯箱

将楽と 勝てうら 月と 巧み

菊五

飛脚屋も 未ぬ 五山の 実利あり

蓮巻

芭蕉 破く 堀間 乃月

雀唄

うの 翁を とりまゝ ありて 翁の中

自牛

あしとく 泣く 寝の 婦の 株

春人

角箱も 未ぬ 見込み ありて 茶抄

了岱

煙草 ありて ありて ありて ありて

茶近

ゆりたて 鏡月の 志と 如大 有居

鳥香

中と 吉村も 踏ぬ 在子

佳水

作け 唯意 ありて ありて ありて

堇崖

神あり ありて ありて ありて

元史



自然堂と存を奉 善友の号  
病のひす 小の素乃そ歌を大  
幅の素 市のつら入らる奉  
響のひ 大のひと能  
志のひ 出を自のそ歌と酒  
あひぬと 匠のあそせと歌と

かゝる世と心ハ一なり 小素の字 習竹

勝月十九日七師七日の尚忌  
かゝる世と心ハ一なり  
心まうの素を備へ奉る

合々々や善友白ひの涙うゑあ 師牛

七師遠空彷彿とて耳を色と難ん

あゝ斬り後日やい無家呼る 望崖  
片ひと風の行とあゝ牡丹可那 飯幣  
姉妹所子とめ在空へあそひ奉る 夢翠  
濁々として海は志終る 清きうり南 古風  
只病り日寒くあゝあ仕るうり奉 逢春  
解たけをきんて備るそ河はう那 市熊  
之をうけて晴る白や秋あそひ 化昇  
身も前 垣も清くは名飲の心 元史



河のくゞと稻乃紐は白ひく角

大亀

藤の標を起すくゞと越ふ野原の氷

菱迹

紐を何くゞと一歩出くゞと稻のつゞ

岩夕

批判しとて是くゞの途しと無縁

崖浦

くゞくゞと松風際くゞにかきくゞと

壺通

手拭を何くゞとと純を何くゞと

素人

くゞくゞと日や一寸とくゞと偏如立ん

住水

麓くゞとくゞと明沙くゞとくゞと荒子くゞと

琴石

くゞ 新 志くゞと植田の雨を又くゞと

栗里

何くゞくゞとくゞとくゞとくゞと新 樹くゞと

南島

若くゞと若くゞとくゞとくゞとくゞとくゞと

桑近

おののくゞとくゞとや麓のつゞとくゞとくゞと

白牛

啼 志めくゞとくゞとくゞとくゞとくゞと

鳥身

貴 考や二の若くゞとくゞとくゞとくゞと

帯銅

控のあくゞと木くゞとくゞとくゞとくゞと

第五

果のあくゞと海をくゞとくゞとくゞとくゞと

梨園



飛石のぬれ花もさき書の上の  
友石

納涼堂乃たりし物もさき書  
榎介

師恩の懐かしくも涙もかき  
あふひ乃空しくも眼ももひ  
さう秘あり

梅うきの層くもさき書  
ヤクコ 菱五

前書行へ

喜徳の甲斐さき書  
文老

河ら鉄——日のさうも相と梅  
琴凌

さう夏の甲斐さき書  
開芝

東の中し本乃さき書  
半畑

老翁の依るを月半  
やてさき書  
あふひ乃空しくも眼ももひ  
さう秘あり

茶と山乃さき書  
とこ 有西

はく無鐘亭さき書  
エナヌ 茶磧

自然堂の依るを父乃  
あふひ乃空しくも眼ももひ  
さう秘あり

僕乃のさき書  
ナニハ 松隣



風の静けさの美事乃家と  
おをあらはしとて

静かなる道とて海は静か  
心路

夕暮も又入り内（靴仕の  
糸を巻いた）はちやうど  
蒼蒼たる威容を想せ舞  
ものたまたの（）も  
おもひのかおこもらん  
ゆらゆら

不似たる波とて月も流るる  
怪々

師の美事お家とてちやうど  
蒼蒼たる威容を想せ舞  
ものたまたの（）も  
おもひのかおこもらん  
ゆらゆら

何れとて眼あらしとて  
霞

何れとて眼あらしとて  
霞  
境界は橋をたどりゆく  
霧月正分西方の雲とて  
ありとて心路の魂  
うらやましく

言の美事とて海は静か  
全



香雪也雪の如くしてを一月  
不可改  
仙友

宗師世を辨  
一雨片庵  
一十年遠塵觀の吟  
縁を更く一後世を  
たひく教ふとけ  
夏の中乃名

櫻の葉や折るまも  
縁天

清浄も又雨の如く  
黛笠

老翁去年の冬  
懐郷を叙して  
雪の如く

拉魯作を  
命を以て  
古人の都

あくまのち  
雪付  
沙北

世のふ  
芳前

修光の  
朱雪

物折や  
松丈

野の春乃  
蘿秀

地波乃  
山月



陪子一を道ハと統々一五月晴 梅子

初也や陣とをえたり釣曲一 下像

平右掃て薪ハ割場を他々一 有詞

月竟ハ幼やとあらん うも屋花 柳空

魂柳や傍く新くを色あはれ 瑞逸

仇立てつる身 神空 隆々一 大卷

自然卷の箱ハ家師とては  
同士のウレを突く一甲寅年  
今午家師月の二十台数半

四葉と一初と一は世哉  
去のふとまをえられハ海陸  
二百甲を屋々一遙子遊博の  
一幸を盡す一且々一南中  
桐樹漫風朗居士と空堂一

伴金文芸山葉志の流一 愈更

悼自然堂前文略

揚子一志々一室々や反古掃除 遙源



弘化三丙午三月二十日管追善

薩摩國鹿兒嶋連

鳳朗居士

森古の松も原根に如くはさむの雲

の青の鏡の影うす交際

子規葉のうらみ赤と見紛はて

新しき色を麦のそとく

馬堀

鉄冠

青靴

多崎の扇のきしきまき

光とてしるすもたし

那も日半に枕は貸し

手もいそがしやい雇人

春の松実乃々字ふまは

身もも新もはきも振袖

月の波の柳の葉のまはる

深き水もふくむと出代

利角

手和

亭玉

泉水

白英

呂專

桐

冠



和尔壁田うけを新あき角力好

北明を海出—菜肉の陸

雜節又侍より羅小買か好

寶治の軍探之—淡

あう—櫛乃可免新晴う—

古今を古何如手作りの雛

紅をう渡りて帯有ふ海舟の初

紙うさふ—新乃披抄

角

和

玉

水

英

專

堀

清をを巻うけと接り状

古い後架子凍る井極

雪借ひ新の老母家の園ひあき

櫛のくも—を拭け眼と面

辻古と化らうと純て神多

めらき—汐のきぬ新田

栞果と栞恒もとか月子と

隠元皇を陸加—く禁

符

瓢

角

和

玉

水

英

專



美むしのいさよと啼く朝  
瓢

やうあうう水引の糸  
冠

手のうちをあらうやまの文あし  
糸

下も草履兔首  
角

世のあはれ利花のふさやう  
水

翔うううハねとあふはつ  
玉

まを輝くあうむうささのあさあ  
堀

ふう新の葉とあうう  
花

雲霞自念首の物草の雲  
あうううとあうううううう  
のうううううううううう  
既をうううううう

鏡の世に代るううう  
うの雪  
う堀

糸の如き通身はうううと  
あううう堀のううう送る

踏う表はあううう江戸のたね  
鐵冠

まううううううううううう  
青瓢

鳴ぬのも顔はうううううう  
利角

まうとあう繩のう涼ううう  
亭玉



手あはるゝ是へて伸す物繩か、白英  
 竹席や粒ひの垂る繩まゝに、呂專  
 ろろけハ藤と青あゝ紙あゝ紙、千和  
 海向て海走の古乃歌うらゝ、丹水  
 鞆立と魯傳く如也まぬ難きうか、上毛 己明  
 妻のねや栢よりけり、鞆袴、琴巻  
 少〜の船、海〜小舟可申、栗山  
 飛船のあゝ海まゝ〜厚く是、谷朗

荳子や啼ぬハをあ〜た〜た、雪庄  
 又〜とま程の屋〜とや梅柳、天朗  
 若深さや字の修葺乃ら伯是ハ、碧言  
 蒼〜つふ〜又〜と〜やまの心、心是  
 船江を〜し〜方〜紐子の如〜と申、桃垣  
 立ぬるも取巻〜と〜離可那、一揚  
 秋の去〜む木と鈴お〜や妻の月、卧雲  
 去〜〜ハ系を〜と〜と〜牡丹うか、松蔭



板也ーの小袖小虫の居るに  
 逸芝  
 由達ひと月もくくたさく秋の雨  
 之刺  
 戸上のをゆかかけくく板乃麻  
 隅人  
 大川の名取の紙の冬にうぬ  
 涼斗  
 鶴代や人か所走のうけく  
 可考  
 妻多くはくゆかさきさき  
 竹崖  
 三月も縁うけくく小松川  
 蓬孫  
 何多れ義と考くく縁月  
 大布

空の共木下ハ虫のくもるう  
 利雲  
 くくくくくくくくくくくく  
 涼水  
 平の峰立とくくくくくく  
 言斗  
 ちくくくくくくくくくくく  
 南  
 草貫て糸のくくくくく  
 寄山  
 夕の日の平くくくくくく  
 柳涯  
 雨たさくくくくくくく  
 庭芝  
 枝先と蒼くくくく木槿り  
 素重

上三六



後立のひきき 春——梅の節、 蓬亭

心と足も流しり引ぬ芽の福分、 澄秋

晴る時やきくると非なる、 曾三

一志きく雨ふり入梅のあけゆく、 市楼

坂成あ——手を突くひふ居るひ、 蕪琴

お——きくそのまきや物のか、 大恒

さや秋をすくさおろえ——麻子か、 吉翁

候う入る月や尾葉のけり候、 奥野

夏末立夏と春あけの梅きり節、 越彦

舟のまきやまねけ毛乃風と流、 梅迄

粒たけのまきも落れぬ、 柳屋

晴のふりともやろく五月早くう、 鹿草

日影さしを候のしりや都り炭、 曹村

十月月や朝来——雨の庭る心、 春湖

曇る日の毛けりし満ち浮森を、 李幸

晴立て波急り世—— 陸りふ、 晴風



及先一歩して船のくぼきく、  
 高嶽、  
 高嶽、  
 明くハるきく、  
 周五、  
 又々怒や二階、  
 清水、  
 舞ふのやきあやき、  
 春成、  
 指ふふ袖、  
 磯前、  
 春、  
 荻村、  
 吹、  
 樵魚、

提灯、  
 化鷹、  
 赤や、  
 其僂、  
 横日、  
 雪貞、  
 降、  
 二葉、  
 水、  
 落丈、  
 蓮、  
 良和、  
 瀬、  
 其桃、  
 才、  
 清勝、



日並らる朝ふ夕暮や稲のうね

稲雲

かくらふとあやもくくそあみか  
けちあもあはた君のいささ

一想

田川花本宗道の君あまを懐き

く川井くわ陽くわきとも志のもと  
あやうきうあまを懐きあはさむ

鶴峯成申

古人の部

あやあま先くわくわく  
くわのむくわくわく  
遠きとくわくわく

氣散りの初らるるけくわくわく

一番子

まうけを今やうめくわくわく

竹魯

空旅くわくわくわくわく

富振

笠籠くわくわくわくわく

石布



朝うけやみふり 咲て々々つり 菫心

ゆりとのけと問はかきや秋のこれ 六

生て居る蝶舞物より五月晴 樹村

名も知らぬもよもぬ席の重屏月 李紅め

厄落し 雑器よりと漏れり 風壺

吹くきこえりやそよ風年の暮 晨支

長うれと暮も志ありや夜の中 宇橋

さうしと告げん雪の身は穉し 冥水

春の雪融あふれは仕替り 一橋

海よりや静や波ふく花の中 其流

遠碇伝は舞のさゆり 夢へな季 三交

かきくもももも 秋のよき 大曾

春の音のやりや強く吹えり 菊社

板敷乃ふちき葉よりと根をよみ 蓬室

共きし似錦よりと交りあふ 三枝

清のよきもあきり 冬月 堇水



新の藪とて冬もどろり那  
房州素共

岸の山 岸の雪とて他流  
岸岳

岸の山や 岸の雪とて他流  
今置

脇起追悼之俳諧  
肥前長壽

鳳朗居士

幸玉やとて終るも梅の志

そと身も 心 朝乃 常  
詠 童

古の歌とて海苔のしり 涙ふて  
手江

あを山とて 戸をの 枝より  
童

君も山とて 坂もつと 存に 加 中  
江

市目又とて 偏て 給 君 釋す  
童



回廊之人夕堂（あま）

神と神と對峙しし新編日分

竹有

此風狂歌の文の傍  
ありておしゝれ

時雨を新々穂花乃々

對竹

夕堂存存をあらりや啼やん

士朗

あめとりものや夕堂のこゝめ  
研竹の以名古を送別の心  
まねのうらやまをいおひ  
しをいひしりもか  
あまのり



